

人生をどう生きるか

(ローマ 12:1-8、ペテロ第一 4:7-11)

ローマ 11 章の終わりに、パウロは心動かす頌栄を綴っています。人には計り知れない神様の知恵と、素晴らしい救いの不思議さゆえに、神様をたたえるものです。原文では、そのまま「そういうわけですから」と記して結論へと続いています。ローマ 12:1 でパウロは「そういうわけですから、兄弟たち。私は、(この手紙でこれまで記してきた)神様の素晴らしく豊かな知恵と栄光と愛とあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。これこそ理にかなない、筋の通った礼拝です。」と書いています。

パウロがローマ 12:1 に記したメッセージをアイザック・ウォッツは賛美歌「さかえの主イエスの」に美しくまとめました。

「驚くばかりの愛、聖なる愛は、私の魂、私の人生、私の全てを求める。」

これは神様に仕える際の、理にかなない、筋が通っていて、論理的な姿勢として、パウロが私たちに強く求めているものです。残念ながら、英語訳の聖書には、パウロの言いたいことを、はっきり記していないものもあります。そのような訳では、この供え物を「霊的な礼拝」や「真の適切な礼拝」と言っています。ここで使われているギリシャ語「logican」は「理にかなった」という意味です。パウロは、私たちがこの捧げ物をするには「理にかなって」いて、「筋が通って」いると言っているのです。この意味は、第一に神様の憐れみゆえにのみ、私たちの全てを捧げることが理にかなない、筋が通っているとみなされるということです。第二に、このことを正しく考えれば、論理的な応答は、私たちの人生を犠牲の供え物として捧げることしかないということです。神様の憐れみを正しく理解すれば(十字架のふもとにたち、神様の御子があなたのために十字架上で死んでくださったことを見るならば)、自分の全てを完全に捧げる以下のことは、全く筋が通らないとわかります。自分の一部だけを捧げたり、心を他に向けながら捧げたりすることは、イエス様があなたのために何をしてくださったかを見ず、しっかり考えていないということです。

「あなたがたのからだを生きた供え物として捧げなさい」とパウロは記していますが、ここで用いられている時制から、これは一回きりの捧げ物だとわかります。何度も繰り返してするものではないということです。神様にあなたのからだを生きた供え物として一度捧げたら、一生そうであり、その土台の上にあなたの人生を生きるのです。神様が私たちのからだを望まれるなんて驚きではないでしょうか。ローマ人への手紙の中で、これまでパウロはからだを「肉」と呼び、神様の望まれることをしたがらない、罪深く、反抗的な性質を持つものと言いました。罪は、手、目、口など私たちのからだを通して現れます。また、からだは年とともに弱り、老いていきます。それでも神様は、そんな私たちのからだを望まれます。そして私たちがそれに従うと、私たちのからだは神様にとって聖く、喜ばしいものになるのです。パウロは、神様に自らを捧げる前に自分の人生を清めなければならないとは言っていません。むしろ、神様は「ありのままのあなたで、私のもとに来なさい。私があるあなたの抱える問題の答えなのだから、私のところにとどまっていなさい。あなたは自分では解決できません。私をあなたの人生に迎え入れるなら、私があるあなたを清めよう。」と私たちに言ってくださっています。

ローマ 12 章 1 節と 2 節を合わせれば、私たちが捧げる生きた供え物を、神様がどうなさるかがわかります。パウロは私たちに、自分たちのからだに関して、理にかなない、筋の通ったことをし、主に一度きりの捧げ物をしなさいと語ります。それに対し、神様は「よろしい。あなたのこの捧げ物を私は受け取ります。それは私にとって聖く、喜ばしいものだから。これからあなたが続けてしていかなければならないことが二つあります。一つ目は、日々、この世と調子を合わせないことです。二つ目は、心の一新により日々作り変えられることです。」パウロの言う、からだを神様に捧げることは、一度きりの行為ですが、世と調子を合わせず、神に変えていただくことは、現在形です。つまり毎日継続すべきことです。あなたは自分のからだを一度神様に捧げ、それを土台にして残りの人生を生きていきます。しかし、世と調子を合わせず、心の一新により神様に変えられてゆくことは毎日続けることです。

「この世の型」とは「この世のやり方」を意味します。神様を知らない人々が生きていく上で用いる青写真、目的、価値観のことです。パウロは「この世の死んでいる価値観や目的や哲学によって、この世の型にはまってはならない。この死にゆく時代の精神にとらわれてはならない。」と言っているのです。この世の精神はいつも同じです。世代によって変わることは決

してありません。この世の型は、自賛と自己の前進です。いつの時代でも、どこに生きる人も皆、自分のために生きています。エゴに取り憑かれているのです。この世で名をあげよう、自分のために富と力を蓄えよう、体裁を良くしよう、周りにいる人を羨ましがらせようという野心を抱いています。

この世の型にははまらなければというプレッシャーはどの社会にも広まります。教会の中でも、この世のやり方で話したり、考えたり、生きたりしています。この死にゆく文化は、パソコン、電話、テレビ、新聞、雑誌、隣人、同僚を通して「この世の型にはまれ」と私たちに叫びます。そのようなプレッシャーを退けるには常に犠牲が伴いますが、この世と調子を合わせてはいけません。この世の自己中心という型に押し込もうとする圧力に対抗するには、この戒めを守らなければなりません。「心の一新によって自分を変えなさい。」

私たちは考えを変えなければなりません。この世のやり方で考え続けていくことはできません。もし考えを変えなければ、必ずこの世の型にはまってしまおうでしょう。パウロの言う変化とは何でしょうか。私たちは、どのように考えを変えるべきでしょうか。この世の破壊的なやり方を見抜く心を得る唯一の方法—それは、聖書にある「キリストの心」をもつことです(1コリント 2:16)。つまり、イエス様のように考え、物事を捉えるという意味です。お金、地位、名誉、力、快樂などのこの世が高く評価する無意味で一時的なものではなく、本当に大切なもの、永遠に重要なものに目を向けなければなりません。キリストの心は、自己のちっぽけな国ではなく神様の御国の前進を望みます。キリストの心は、「私の思いではなく、主よ、あなたのみこころがなりますように。」と言います。日々心が作り変えられなければ、キリストの心をもつことはできません。

では、心を変えるには、どうすればいいのでしょうか。聖書を読み、学ぶことで心は変えられていきます。また、キリストの心をもつ信徒との交わりを通し、聖句暗唱を通し、みことばが解き明かされるのを聞くことでも、心は変えられていきます。ですから、聖書全体の講解説教は非常に重要です。

混乱の時代、めまぐるしく変化する文化や社会の中で、私たちはみことばに耳を傾け、神様の思いに寄り添うことで、心を変えていく必要があります。私たちの目的は、周りの人が何を正しいと言うかではなく、神様が何を正しいと言われるかを見出すことです。人を中心にするこの世の考えは、魂を破壊し、家族を崩壊させ、私たちの国家の道徳を台無しにしています。みことばの真理だけが、魂や家族や社会を癒すことができます。では、あなたは残りの人生をどう生きますか。この世がそう望み、誘惑するように自分を高めたり、賞賛したりして生きていきますか。それとも、神様がくださる時間を、永遠に続くものに投資しますか。あなたの答えは、ローマ 12:1-2 のパウロの勧めにどう応答するかにかかっています。あなたは自分のからだを生きた供え物として神様にすすんで捧げますか。この世の洗脳を拒否し、世の型にはまらないキリスト者として生きていきますか。キリストの心でこの世を見るために、日々心の一新によって変えられることを望みますか。

3 節から 12 節の終わりにかけて、パウロは心の一新によって変えられるということが何を意味するのか詳しく記しています。はじめは、自分自身をどう見るかについてです。3 節に「あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。」とあります。自分のことを高く評価することを避けなければなりません。私たちの文化では、自分を低く評価することの危険に対する警戒を呼びかけますが、本当の危険は自己中心にいることです。私たちは皆、自分の知恵や能力や誠実さや力を誇示しがちです。しかしキリストに従う私たちは、それを避けなければなりません。CS・ルイスはクリスチャンではない人で自分の高慢さやうぬぼれを認めた人を 1 人も知らないと言いました。私たちも常にこの危険に注意する必要があります。自分でないもの、自分のできないことを知ると、周りの人に頼ることを学ぶことにつながります。

また同様にパウロは「いや、むしろ、慎み深い考え方をしなさい。」と言います。慎み深いとは現実を見ていて、極めて正しいという意味です。「謙遜しなさい。」とか「自分より他人を高く評価しなさい。」ということではなく、ここでパウロが言っているのは、自分に与えられた能力を過小評価しないように注意しなさいということです。得意なことや、上手にできることを認識しなければなりません。そのようなことを用いて周りの人に仕えることができるようになるためです。自分をまっすぐに見つめ、過大にも過小にも見ないようにしましょう。パ

パウロは、「神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて」慎み深い考え方をしなさいと言います。それから、彼は、自分自身を見るもう一つの方法について話を進めています。つまり、からだを構成する人々それぞれのもつ賜物についてです。これが自分を正しく評価する方法です。

3節を読むとき、多くの人が「信仰の量り」を「信仰の量」と思います。つまり、私たちの考えは、信仰の量によって決まり、神様は信仰のある人には他の人より多く与えておられるとパウロが言っていると考えるのです。しかしローマ人への手紙で、パウロが語ってきたことを考えるとそうではなさそうです。それに、「量り」と訳されているギリシャ語は「metron」ですが、これは量ではなく、量りの基準と考えるのが妥当でしょう。言い換えれば、パウロは「あなたがたは皆、キリストの十字架によって救いの信仰をいただいており、それを基準に自分自身を見定めなさい。」と言っているのです。これは、まず初めに私たちは皆同じだとわかる必要があることを意味します。人種、生い立ち、能力などに関わらず、私たちは皆、キリストにあつて救われました。また神様は、キリストにあつて私たちが等しく愛して下さっています。福音は私たちが自分の思うべき限度を越えて思い上がらないよう助けてくれます。私たちは罪人であり、私たちの努力は全て裁きを受けます。私たちは、神様の恵みと優しさのみによって、救われました。また、福音は私たちが自分の思うべき限度を下回って卑下しないようにも助けてくれます。私たちは、救いをいただいた罪人です。私たちは神様に愛され、神様の目に尊い存在です。それに、最終的に神様がどう思われるかが大事なのですから。私たちが自分を見るとき「基準」の一つ目は、私たちの信じている福音です。

次に、私たちはキリストのからだの中で明確な賜物や能力を授かっていると考えるべきです。言い換えれば、私たちは皆異なります。クローンではありません。福音における私たちの立場は同じですが、お互いに仕えるために与えられた能力は異なります。もし人のからだが大きな目玉一つだけだったり、手だけだったり、足だけだったり、舌だけだったりしたら、「気持ち悪く」て、おぞましいです。しかし、一種類だけの会員で教会をつくらうとする人もいます。そのような人は、多様性ではなく、画一性を求めます。私たちは一人ではなく多くのメンバーで構成されていると神様は言われます。神様が教会に対して持つておられる目的は画一化ではなく、多様性の中にある一致です。教会の中で皆が同じであるべきことは、お互いへの愛情と

思いやりです。私たちがお互いを同じように愛するなら、キリストのからだの中で美しい多様性を備えた栄光に輝く一致を持つことができるでしょう。繰り返しますが、キリストのからだの概念は、私たちが自分の限度を外れて過大評価したり(私たちには教会の全ての人が必要で
す)、過小評価したり(教会の人はあなたを必要としています)しないように助けてくれます。

パウロは「私たちが異なる賜物をいただいている」ことを思い出させてくれます。また忘れてならないのは、これらの賜物は「与えられた恵みに従って」いただいたものだということです。(6節) 私たちに義だけではなく賜物や能力をも与えてくださることから神様の恵みを見ることが出来ます。これらの賜物は自分のためではなく、属しているキリストのからだの徳のために用いられるように与えられました。自分を見る二つ目の方法は、私たちが属するのは自分ではなく、キリストを頭とするからだ一教会であることを忘れないことです。そして神様が働きにふさわしく備えてくださる賜物を見極め、全力で教会の働きに携わることも忘れてはいけません。

6節後半から8節で、パウロは神様ご自身の民にお与えになる賜物を挙げています。これは賜物を全て網羅したものではありません。(コリント第一 12:8-10,28 やエペソ 4:11 も完全なリストではありません。)ペテロ第一 4章を読むと、ペテロが賜物には二つのグループがあると言っているようです。それは話す賜物と仕える賜物です。ローマ 12章ではパウロが話す賜物の例を四つ挙げています。一つ目は、預言です。聖書を紐解き、みことばの意味にいのちを吹きこむ働きです。この賜物は、「信仰の量り」に応じて用いられるものです。つまり、この賜物を用いる人は、自分の知識の限界を越えて使うべきではないという意味です。聞く人が生活に適用できるように、みことばの理解を深めれば、解き明かす能力も増します。二つ目は、教える賜物です。これは真理を明らかにし、わかりやすく説明する賜物です。良い教師が必ずしも良い説教者であるとは限らないし、逆もまた然りです。また教える賜物は、少人数のグループに教えるのが得意な人、また大人数のグループ、子供のグループ、同年代のグループ、年配者のグループなどに教えるのが得意な人という風に幅があります。三つ目は勧めの賜物です。新約聖書の中で、この賜物を持った人といえばバルナバです。名前の意味も「励ましの子」です。使徒行伝で、バルナバはいつも人々に励ましや慰めや勧めの言葉をかけています。最後は、指導の賜物です。原語のギリシャ語では「集まりを導く」という意味です。パウロは、指導に

関して、熱心に行いなさいと説いています。つまり、よく考えて準備し、順序良く会を導きなさいということです。指導の賜物は素晴らしく、キリストのからだにはとても必要なものです。

またパウロは仕える賜物の例を三つ挙げています。一つ目は、奉仕の賜物で、コリント第一 12:28 にある人を助ける賜物と同じと考えてよいでしょう。奉仕の賜物も執事、受付、お茶の準備、トイレの掃除など様々です。奉仕の賜物を持っている人は喜んで人を助けることができ、助ける方も助けられる方も祝福を受けます。二つ目は分け与える、「人の必要に貢献する」賜物です。神様はこの賜物を持つ人に寛大な心をお与になられているので、そのような人は見返りを求めず、いつも与えて、与えて、与えます。もしあなたがこの賜物を持っているなら、使いましょう。あなたが与えれば与えるほど、神様はさらにあなたに与えてくださり、もっと人に分け与えることができるでしょう。三つ目は慈善を行う賜物です。これは素晴らしい賜物で、病人、障害者、高齢者、路上生活者、引きこもり、囚人、未亡人、孤児への働きなど多くの活動があります。社会全体に助けを必要としている人、傷ついた人、憐れみを求めている人がいます。

これまで見てきたように、キリストのからだに属する信徒には基本的に二つの働きがあります。話すか仕えるかです。もちろん中には両方する人もいます。例えば、指導と励ましと分け与える賜物を持つ人です。要は、すべての人が、教会というからだの徳のため、またお互いを立てあげるために、神様からいただいた賜物を用いて関わることを求められているのです。もし語りも仕えもしていないなら、あなたは賜物を用いていないということです。霊の賜物について学び、自分に与えられている賜物を知り、神様と教会のためにその賜物を使い始めましょう。神様の生きた供え物になるというのは、自分の才能や賜物を神様に用いていただくために捧げることでもあります。そしてイエス・キリストから目をそらさず、神様の憐れみの中で初めて、喜んですることができるようになるでしょう。

アーメン